

莊子郭象注譯稿 外篇第八 駢拇

(前半)

水 野 厚 志

諸言

『莊子』というテキストは、「漢志」には『莊子』五十二篇と記されており、漢から晉までは五十二篇本が通行していたと考えられている。この五十二篇本に注を付けたのが晉の司馬彪であり、續いて崔譔（五十五篇本）・向秀（二十から二十八篇本まで諸説ある）・郭象（五十二篇本の『莊子』に似つかわしくない部分を三割削ったとされる三十三篇本）の注が相繼いで生まれた。

舊本である五十二篇本は、宋代の頃までは存在していたのだが、郭象注が重んじられるとともに廢れていき、目下のところ、郭象注が『莊子』に對する現存する最古の注となっている。

その「郭象注」であるが、特質の一つに向秀注である「莊子隱解」——『列子』張湛注や『經典釋文』の中などに向秀注は殘存している——と似ている部分が多い爲、未完であった「秋水」・「至樂」篇を補充し、「馬蹄」篇を置き換えた上で、向秀注を剽竊した（『世說新語』による）と考える者（近時のものでは、侯外廬『中國思想通史』・黃錦鉉「關於莊子向秀注與郭象注」などがある）も多い。しかし、例えば「有生於無」について郭象は「獨化」という独自の言葉によって解釋しており、「無爲」・「無心」については、向秀の「得全乎無者、自然無心、委順至理也」や司馬彪の「唯無心而不自用者、爲能隨變所適而不荷其累（ともに「人間世」の注である）」を基にして、郭象注の「無心而任自然」・「獨化於玄冥之境」という独自の思想が導かれており（湯一介『郭象與魏晉玄學』による。尚、湯一介は「述而廣之」と記している）、或いは「逍遙」義についても向秀の説を補填し、自説を展開している。

そこで剽竊説が生まれた原因を考えると、袁宏の「名

士傳（『世說新語』に注引されている）に「子玄（郭象の字）雋才有り、能く莊老を言ふ」とあり、『晉書』郭象傳に「小くして才理有り、老莊を好み、清言を能くす。州郡辟召すれども就かず。常に閑居して、文論を以て自ら娛しむ」とあった郭象が、後に司徒掾・黃門侍郎とい

う付屬的な官職から大侍主簿という高官に就き、權力を握ることとなり、「内外に熏灼し、是れに由りて素論之れを去る」と記載されているように、變化していったことに原因があるものと容易に想像できる。この問題は「自適」・「獨化」・「不廢名教而任自然」という世間から離れることのない自然を説いてきた郭象注が世に受け入れられ、權力を握る側に立った郭象が、晩年に「素論」を捨てたと非難されるようになったことと切り離せない關係であるように見受けられるので、郭象注に現れている政治思想を『世說新語』などの名士の評價と實際に照らし合わせた上で再構築し、結論を導き出す必要がある。また、向秀・司馬彪の注と郭象注との關係を探るには『列子』張湛注や『經典釋文』中の「莊子音義（向秀・

司馬彪注、崔譔・李頤・李軌などの集釋の音義が記されている）」と比較することによってその關係がよりいっそう明らかになると考えられる（この二點は今後の課題である）。

以上、「郭象注」に關する概略を記したが、郭象注は、三玄を中心に論ずる魏晉玄學の中において、魏の王弼の「老子注」・魏の何晏の「論語集解」・東晉の張湛の「列子注」とともに重い位置を占めており（それは、郭象が王弼の亞と稱爲されていることから知る事ができる）、三經合一の柱の一つである「道」の思想が後世に及ぼした計り知れない影響に鑑みて、「郭象注」を明らかにすることは、郭象の政治思想や現行本『莊子』の原形を知る手段に限らず有意義なものである。しかし、『莊子』郭象注の完全な譯注は、管見する限りにおいては未見である。そこで多少なりとも自他に供することができればと考え譯注を進めることにした。

凡例

起稿にあたり、次の凡例を設ける。

- 1 北京中華書局版標點本（新編諸子集成）『莊子集釋』を底本とする。
- 2 内篇の郭象注に對する譯注は、斷片的にはあるが存在するので（中野達氏など）、差し當たつて外篇から進めていくことにする。
- 2 本文・書き下し文・本文譯・經典釋文・（經典釋文の）書き下し文・注・（注の）書き下し文・（注の）譯文の順に構成し、それぞれの原文には必要に應じて語釋を付す（語釋を付した箇所は原文の右肩に算用數字で示す）。
- 3 『經典釋文』について、向秀・司馬彪などとの關連が指摘される箇所は、語釋を付し解説を加えていくこととし、音義については郭象の解釋と合わないものについては取り入れないが（同時代人の注釋として参考に擧げる）本文に齟齬しないものについては、譯注に取り入れることとする。
- 4 「郭象注」に對する語釋は、本文に對する語釋と重なる場合は、煩瑣にならぬよう注記せず、『莊子』本文の現代語譯に反映させるようにする。
- 5 盧文弨『群書拾補』・俞樾『諸子平議』・王念孫『讀書雜誌』については、原文に當たり、本文および注の解釋を左右する場合は、「語釋」の中に盛り込む。
- 6 譯注の性質上、煩瑣な參考文獻はいちいち付さないが、解釋上重要な部分やそのまま引用した文獻・著作物については、きちんと明示する。
- 7 本文に郭象注を並記していく關係上、一連の長い文章は文意に拘わらず、一定の長さで切ることとする。
- 8 原文を書き下し文にするに當たり、「若し」・「如し」・「可し」・「爲り」といった助動詞は、復文との兼ね合いから、漢字のままとする。また、一部のも

のに限るが、「曰はく↓曰く」・「於いて↓於て」・
「復た↓復また」・「以つて↓以て」・「於いて↓於て」と
いうように、送り假名のきまりに従っていないもの
もある。

莊子郭象注

外篇第八 駢拇

1

【本文】

駢拇枝指¹、出乎性哉²。而侈於德³。附贅縣疣⁴、出乎形哉⁵。
而侈於性⁶。多方乎仁義而用之者⁷、列於五藏哉⁸。而非道德
之正也。是故駢於足者、連无用之肉也。枝於手者、樹无
用之指也。多方駢枝於五藏之情者⁹、淫僻於仁義之行、而
多方於聰明之用也。

《書き下し文》

駢拇枝指は、性に出づるか。而して徳に侈れり。附贅
縣疣は、形に出づるか。而して性に侈れり。仁義に多方
にして之れを用ふる者は、五藏に列するか。而して道德

の正しきに非ざるなり。是の故に足に駢ある者は、无用
の肉を連ぬるなり。手に枝ある者は、无用の指を樹つる
なり。五藏の情に多方駢枝なる者は、仁義の行に淫僻に
して、聰明の用に多方なるなり。

《本文譯》

足の親指と人差し指がいっしょになった者や手の親指
が二つに分かれた者は、人間が生まれながらにして持っ
ている性質から出たものであるうか。しかし衆人に比べ
ると餘分な持ち前である。餘分な肉が體にくっついた疣
やぶら下がった瘤は、肉體から出てきたものであるうか。
しかし人間が生まれながらにして持っている性質からみ
ると餘分である。

仁義を多方面にわたって實踐する者は、(肝・心・脾・
肺・腎の)五藏に根ざす情に配列されるのだろうか。し
かし本来それは道德の正しい働きではない。だから足の
指がくっついた者は、無用の肉をつけているのである。
手の指が二つに分かれた者は無用の指をそなえているの
である。

(肝心脾肺腎の) 五藏の働きを多方面にわたって実践する者は、仁義の行いにほしいままに心を奪われ、見たり聞いたりする働きを多方面にわたって餘分に行っているのである。

【語釋】

1 駢拇

足の親指が人差し指とくっついている者 (【釋文】)。

2 枝指

手の指が六本ある者 (【釋文】)。

3 性

自然のものであり、おのずから定まった本分である。

なお、池田知久氏は、『性』や『性命の情』は、逍遙游篇以下の内篇七篇には見えず、ここに至って初めて登場することはであるので、このことをもって、内篇の古さと外・雜篇の新しさを論じようとする向きもあるが、それは正しくない。あえていえば、内七篇に『性』が見えないのは、單なる偶然でしかない」と述べる (中國の古典5 莊子上) が、その論證は今後の課題となろう。

4 而侈

餘分。多い。盧文弨は「郭云ふ、『多貌』。司馬云ふ、『溢なり』。崔云ふ、『過なり』」という (『群書拾補』)。尙、現存する「郭象注」には「郭云ふ、『多貌』の語釋は見られない。

5 德

そわる。具備する。持ちまえ。いわゆる「德は得なり」である。盧文弨は「崔云ふ、『德は、猶ほ容のごときなり』』という (『群書拾補』)。また俞樾は、「崔云ふ、『德は、猶ほ容のごときなり』』、司馬云ふ、『性は、人の本體なり』』とは、性と德とを混せて形と與にして之れを一にするは、殊に其の旨を失へり (『諸子平議』)」とい、本文での解釋は俞樾の通りであるが、ここでは『釋文』に従った。

6 附贅縣疣

附贅は、くっついた疣。縣疣は、ぶら下がった瘤。

「大宗師篇」にも記されている。

7 五藏之情

『黄帝素問（【釋文】の語釋を參照）』では心臟は舌、肝臟は目、肺臟は鼻、腎臟は耳、脾臟は口にそれぞれ配當している（【釋文】を參照）。また陰陽應象大論篇には、「天に四時 五行ありて、以て生長收藏し、以て寒・暑・燥・濕・風を生ず。人に五情ありて、五氣を化して、以て喜・怒・思・憂・悲を生ず」と記載されている外、五行と様々な臟器・部位・感情とが結びつく例をみることが出来る。なお、赤塚忠氏は『漢書』翼奉傳を引いた上で「すでに戰國時代に、さまざまな事象を五行に配當してその關係を考えることが行われていたのは確かであるから、あるいはその當時すでに五常（仁義禮知信）を五藏に配當する説があったのかも知れない（全釋漢文大系16莊子上）」と述べている。

また、池田知久氏は、「五常の徳目を五行説に合うように整えたのは、董仲舒に始まることであり（狩野直喜『中國哲學史』）、その五常を五藏に配當するのは、さらに遅れるようである（楊樹達は『白虎通』情性篇を、福永光司は『漢書』翼奉傳を、それぞれ擧げる）から、呂

惠卿・陳景元などの如く、これを五常を五藏に配當した文章と解すれば、本書の成立は早くとも前漢中期に置かれることになる。しかし、この仁義はまだ五常になっていないので、精密に五藏への配當を考えていないものとするべきであろう（中國の古典5莊子上）」という。

8 淫僻於仁義之行

淫僻は、みだらで道に外れること。仁義について、澤田多喜男氏は、「生得的な自然性尊重の立場から批判されていることが明らかで、武内氏も指摘しているように、聖人・仁義批判とともに、性の尊重の主張が四篇の思想の重要な面であることを見逃してはならないと思う。性の尊重の思想が中核となって、仁義に代表される世俗の價值觀への激しい批判がでて來たのである。ただ性の尊重といっても、養生思想の場合には、養形・養身的なものでも超越的な傾向を帯びた養心的なものでも、いずれも關心は個人・個體に向けられており、對社會的な關心は稀薄である」と述べる（東方宗教第26號所收「駢拇以下四篇について」）。

9 聰明

聰は耳のさとさ、明は目の明らかさ。澤田多喜男氏は、『莊子』の駢拇・馬蹄・胠筐・在宥の四篇は、『莊子』全篇の中でも特殊なものとし、その特色の一つとして「四篇の思考法の中核をなすと思われる事實に即しての知的分析的傾向」を擧げ、「駢拇篇では人並みすぐれて明であり聰である離朱や師曠を否定し、馬蹄篇では『无知と同じければ、其の徳離れず』といい『好知』を批判し、胠筐篇では『棄知』や『含明』『含聰』『含知』を説き、世俗の知や至知を否定し、『好知』を批判するし、在宥篇では『説明』や『説聰』『説知』『好知』を批判し、『棄知』を説くという事實はあるが、それにも拘わらずこの知的分析的思考は、四篇を通じて貫かれているといえる」と述べる（東方宗教第26號所收「駢拇以下四篇について」）。

【釋文】

舉事以名篇。「駢」步田反。『廣雅』¹云、竝也。李²云、併也。「拇」音母、足大指也。司馬³云、駢拇、謂足拇指

連第二指也。崔⁴云、諸指連大指也。「枝指」如字。『三蒼』云、枝指、手有六指也。崔云、音歧、謂指有歧也。

「附贅」章銳反。『廣雅』云、疣也。『釋名』⁶云、橫生一肉、屬著體也。一云、瘤結也。「縣」音玄。「疣」音尤。「而侈於性」司馬云、性、人之本體也。駢拇、枝指、附贅、縣疣、此四者各出於形性、而非形性之正、於衆人爲侈耳。於形爲侈、於性爲多、故在手爲莫用之肉、於足爲無施之指也。王⁷云、性者、受生之質。徳者、全生之本。駢枝受生而有、不可多於徳。贅疣形後而生。不可多於性。此四者以況才智徳行。

「五藏」才浪反、後皆同。『黃帝素問』⁸云、肝心脾肺腎爲五藏。

「淫僻」本又作辟、匹亦反、徐敷赤反。注及篇末同。「於仁義之行」下孟反。崔云、駢枝贅疣、雖非性之正、亦出於形、不可去也。五藏之情、雖非道德之正、亦列於性、不可治也。今設仁義之教以治五藏之情、猶削駢枝贅疣也、既傷自然之理、更益其疾也。「橫復」扶又反。除篇末注皆同。「至當」丁浪反。後皆倣此。

《書き下し文》

事を舉げて以て篇に名づく。「駢」は步田の反。『廣雅』に云ふ、「竝なり」と。李云ふ、「併なり」と。「拇」は音母、足の大指なり。司馬云ふ、「駢拇は、足の拇指第二指に連なるを謂ふなり」と。崔云ふ、「諸指大指に連なるなり。枝指は字の如し」と。『三蒼』に云ふ、「枝指は、手に六指有るなり」と。崔云ふ、「音歧、指に歧有るを謂ふなり」と。

「附贅」は章銳の反。『廣雅』に云ふ、「疣なり」と。『釋名』に云ふ、「横生の一肉、體に屬著するなり」と。一に云ふ、「瘤結なり」と。「縣」は音玄。「疣」は音尤。「而侈於性」は、司馬云ふ、「性は、人の本體なり。駢拇・枝指・附贅・縣疣、此の四者は各おの形性に出で、而して形性の正しきに非ず、衆人に於ては侈れりと爲すのみ。形に於ては侈と爲り、性に於ては多と爲る。故に手に在りては用莫きの肉と爲り、足に於ては施無きの指と爲るなり」と。王云ふ、「性なる者は、生を受くるの質。徳なる者は、生を全くするの本。駢枝は生を受けて有り、

徳に多なる可からず。贅疣は形の後にして生ず。性に多なる可からず。此の四者は以て才智徳行に況ふ。

「五藏」は才浪の反、後皆同じ。『黃帝素問』に云ふ、「肝・心・脾・肺・腎を五藏と爲す」と。

「淫僻」は本又辟に作る、匹亦の反、徐は「敷赤の反」と。注及び篇末も同じ。「於仁義之行」は下孟の反。崔云ふ、「駢枝贅疣は、性の正しきに非ずと雖も、亦形に出づれば、去る可からざるなり。五藏の情は、道徳の正しきに非ずと雖も、亦性に列なれば、治む可からざるなり。今仁義の教へを設けて以て五藏の情を治むれば、猶ほ駢枝贅疣を削るがときは、既に自然の理を傷ひ、更に其の疾を益すなり」と。「横復」は扶又の反。篇末の注を除けば皆同じ。「至當」は丁浪の反。後皆此れに倣へ。

【語釋】

1 『廣雅』

十卷。魏の張揖の撰。最古の字書である『爾雅』を

『箋注』・『三蒼』『説文などにより増補したもの。

2 李

李の姓は、李頤（『李頤集解三十卷三十篇』・李軌（李軌音一卷）の二名を擧げることができる。『釋文』中においては、姓だけでなく李頤と明示している所もあり、字音を記している箇所は李軌とみることもできるが、疑問の餘地を残している（黄華珍『『莊子音義の研究』』。

3 司馬

司馬彪（不詳）306）字は紹統。河内温縣（現在の河南省温縣の西）の人。騎都尉・祕書郎・祕書丞・散騎侍郎などの官職を歴任。『續漢書』の編者としても名を残す。

4 崔

崔譔。清河（現在の山東省清縣の北東）の人。六朝晉の議郎であった。『莊子』に對する注は、十卷二十七篇あったと「釋文序録」に記載がある。

5 『三蒼』

前漢初めの字書。李斯の「蒼頡篇」・趙高の「爰歷篇」・胡毋敬の「博學篇」が後に『蒼頡篇』と合稱されるよ

うになったが、その別稱を『三蒼』という。

6 『釋名』

八卷。漢の劉熙の撰。『爾雅』に倣い、訓詁・音義によって事物に解説を施す。

7 王

王姓による注は、「王」一字のほか、王肅・王逸・王穆夜などの姓名をみることができる。「釋文序録」に「王叔之義疏三卷」と明記されているので、王一字で見える場合は恐らく王叔之を指す。また「釋文序録」には、王叔之は琅邪の人、宋の處子とある（黄華珍『『莊子音義の研究』』。

8 『黃帝素問』

最古の醫書。傳説の帝王である黄帝と名醫の岐伯との問答が記載されている。「方伎略」に載る三十七書中で唯一現存するとされる『黃帝內經』が、後漢期に、増補と『素問』・『鍼經』への二分割を受けたものである。唐の王冰の注が通行している（東京大學出版會『中國思想文化事典』「醫藥」―林克を参照）。

徐邈。字は仙民。東莞（現在の山東莒縣）の人。姑幕・

中書舍人・散騎常侍・驍騎將軍などを歴任。徐邈音三卷と「釋文序録」に記載がある。

【注】

夫長者不爲有餘、短者不爲不足、此則駢贅皆出於形性、非假物也。然駢與不駢、其性各足、而此獨駢枝、則於衆以爲多、故曰侈耳。而惑者或云非性、因欲割而棄之、是道有所不存、德有所不載。而人有棄才、物有棄用也。豈是至治之意哉。夫物有大小、能有少多。所大即駢、所多即贅。駢贅之分、物皆有之、若莫之任、是都棄萬物之性也。

夫與物冥者、無多也。故多方於仁義者、雖列於五藏、然自一家之正耳、未能與物無方而各正性命、故曰非道德之正。夫方之少多、天下未之有限。然少多之差、各有定分、毫芒之際、即不可以相歧、故各守其方、則少多無不自得。而惑者聞多之不足以正少、因欲棄多而任少。是舉天下而棄之、不亦妄乎。有少多、所大即駢、所多即贅。

駢贅之分、物皆有之、若莫之任、是都棄萬物之性也。

直自性命不得不然。非以有用故然也。

五藏之情、直自多方耳、而少者橫復尙之、以至淫僻、而失至當於體中也。

聰明之用、各有本分、故多方不爲有餘、少方不爲不足。然情欲之所蕩、未嘗不賤少而貴多也、見夫可貴而矯以尙之、則自多於本用而困其自然之性。若乃忘其所貴而保其素分、則與性無多而異方俱全矣。

《書き下し文》

夫れ長き者には餘り有りと爲さず、短き者には足らずと爲さざるは、此れ則ち駢・贅は皆形性に出で、假物に非ざればなり。然れども駢と不駢とは、其の性各おの足るも、而も此の獨り駢枝なるは、則ち衆に於いて以て多しと爲す。故に「侈れり」と曰ふのみ。而して惑ふ者は或ひは「性に非ず」と云ひ、因りて割きて之れを棄てんと欲す。是れ道には存せざる所有り、徳には載せざる所有り。而して人に棄才有り、物に棄用有るなり。豈に是れ至治の意ならんや。夫れ物には小大有り、能に少

多有り、大なる所は即ち駢、多なる所は即ち贅。駢・贅の分は、物皆之れ有り。若し之れに任すこと莫ければ、是れ都て萬物の性を棄つるなり。

夫れ物と冥なる者は、多きこと無きなり。故に仁義に多方なる者は、五藏に列ぬと雖も、然れども自ら一家の正なるのみ、未だ物と方無くして各おの性命を正すこと能はず。故に「道德の正しきに非ず」と曰ふ。夫れ方の少多は、天下未だ之れを限ること有らず。然れども少多の差は、各おの定分有り、毫芒の際には、即ち以て相踈つ可からず。故に各おの其の方を守れば、則ち少多自得せざる無し。而して惑ふ者多の以て少を正すに足らざるを聞き、因りて多を棄てて少に任せんと欲す。是れ天下を擧げて之れを棄つるも、亦妄ならずや。

直 自ら性命の然らざるを得ざるのみ。用有るを以ての故に然るには非ざるなり。

五藏の情は、直 自ら多方なるのみ。而して少なき者は横ほしままに復之れを尙びて、以て淫僻に至り、而して至當を體中に失ふなり。

聰明の用は、各おの本分有り、故に多方は餘り有りとならず、少方は足らずとならず。然れども情欲の蕩く所、未だ嘗て少を賤みて多を貴ばずんばあらざるなり。夫の貴ぶべきを見て矯めて以て之れを尙べば、則ち自ら本の用に多くして其の自然の性を困みだす。若し乃ち其の貴ぶ所を忘れて其の素の分を保てば、則ち性と多きこと無くして異方俱に全し。

《譯文》

(鶴の脛のように) 長いのに餘分があると思わず、(鴨の脛のように) 短いのに不足だと思わないのは、足の親指と人差し指がいっしょになったものや餘分な肉が體にくっついた疣を持つものがすべて生まれつきの肉體に出たものであって、假り物ではないからである。しかし足の親指と人差し指が一緒になったものとそうでないものは、持って生まれた性質はどちらも充分であるのに、足の親指と人差し指がいっしょになったものや手の親指が二つに分かれたものだけは、衆人に比べて多いと思う。だから侈(多い・多すぎる)というのである。しかし分

別・判断のつかない者はある時には「人間が生まれながらにして持っている性質ではない」といい、そこで引き裂いてすてたいと思う。衆人の道理には存在しない所があり、人間の持って生まれた持ちまえとしては設けられていないものもある。そして人間には才能があるにもかかわらず君主や世の中から見捨てられたものが存在し、物には役に立たないのかえって有用なものも存在する。どうしてこれ世の中が非常によく治まっていると考えることができようか。そもそも物には小さいものと大きいものがあり、物のはたらきには少ないものと多いものがある。大きなものは足の親指と人差し指がひつついたものであり、多いものはくつついた疣である。駢や贅の分は、物が本来備えているものである。もしもその分に委ねなければ、それはすべて萬物が本来持っている性質をすて去ることになる。

萬物といっしょになって奥深いところに隠れている者は、多くはない。だから仁義を多方面にわたって實踐する者は、(肝・心・脾・肺・腎の)五臓の働きに比例す

るといっても、本来それは一流派の道理にすぎないのであり、まだ萬物と一緒にあって持って生まれた性質を改めることができない。だから「道徳の正しい働きではない」というのである。もって生まれた性質が少ないだの多いだのと、天下にこれを限定したことなどない。しかし少ない多いといった格差があるのは、それぞれに定まった分があるからであり、ほんのわずかな格差であっても、跛けることはできない。故にそれぞれが自分のもって生まれた性質を守っていれば、少ないものも多いものも自得するものである。しかし分別・判断が付かないものももって生まれた性質の多いものが少ないものを正す資格がないということを耳にすれば、もって生まれた多い性質をすて去って少ないものに委ねようと思う。そうして世の中の人々がこぞもって生まれた性質が多いものをすて去るといっても、(實の性を)いつわることではないのか。

ただ人間が生まれながらにして備えている天性・天命はあるがままに存在しなければならぬだけである。そ

れは役に立つということによって、備わっているのではない。

五藏が本来持っているはたらきは、自然と多方面にわたっているにすぎない。しかし不足していると思う者は、好き勝手にその性質に思いを寄せて、ほしいままに至り、そしてこの上なくよい性質さえ體の中に見失ってしまうのである。

見たり聞いたりする働きには、それぞれの本分があるので、多方面にわたるものは餘分があると思わず、少ないものは不足しているとは思わない。しかしむさぼり執着する心に揺り動かされている場合は、必ずもって生まれた性質が少ないものを見下げ、多いものを重用する。その重用すべきものを目にし、異を立てて重用するならば、自然に本来あるべき作用（に対する働きかけ）を増すことになり、人間が生まれながらにして持っている性質を亂してしまふ。もしもそこで（もって生まれた性質によって人を）重用する状況を氣に留めず、もともと備わった分を維持するならば、人間が生まれながらにして

持っている性質を亂すことなく（多い少ないといった）異なる性質はみな保たれる。

【語釋】

1 多方

方は方術。『荀子』堯問篇、『呂氏春秋』贊能篇、『史記』始皇本紀などにも見える語。一面的局部的な立場にたつ學問藝術をいい、普遍的根源的な眞理を問題とする立場にたつ「道術」（道は根本原理をいい術はその運用をいう）と對應する。多方は、『莊子』天下篇本文に「惠施は多方にして、其の書は五車」とあるほか、『尙書』多方篇、『春秋左氏傳』昭公三十年などにも見える語。多方面にわたる學術をいう（福永光司 中國古典選17『莊子』雜篇下を参照）。また、郭象注においては、多方面にわたる性質、作用、技能の意味で用いられる場合がある。

2 性命

物が自然の分として有する自己の命。萬物が天から受けた各々の性質。『易經』乾に「乾道變化し、各おの性

命を正しくす」とある。郭象はこの性命を必然的にそうなっているものであり、無爲によって物が自然の分として有する自己の命を全うすべきだと説く。

3 毫芒

毛と禾のき。きわめて微細な物のたとえ。

4 自得

郭象は道を必然的にそうなっているもの（自得・自然・獨化など）とし、『莊子』本文に對する注では、存在論的な解釋を施していない。

2

是故駢於明者、亂¹五色、淫²文章、青黃黼黻之煌煌非乎。而離朱是已。多於聰者、亂⁵五聲、淫⁶六律、金石絲竹黃鐘大呂之聲非乎。而師曠是已。枝於仁者、擢⁸德塞性以收名聲、使天下簧鼓以奉不及之法非乎。而曾史是已。駢於辯者、纍瓦結繩、竄¹⁰句遊心於堅白同異之間、而敝跬譽無用之言非乎。而楊墨是已。故此皆多駢旁枝之道、非天下之至正也。

《書き下し文》

是の故に明に駢なる者は、五色に亂れ、文章に淫る。青黄・黼黻の煌煌たるは非なるか。而して離朱是れのみ。聰に多なる者は、五聲に亂れ、六律に淫る。金石・絲竹・黄鐘・大呂の聲は非なるか。而して師曠是れのみ。仁に枝なる者は、徳に擢きんで性を塞いで以て名聲を收め、天下をして簧鼓して以て及ばざるの法を奉ぜしむるは非なるか。而して曾史是れのみ。辯に駢なる者は、瓦を纍ね繩を結び、堅白同異の間に竄句して遊心し、而して跬譽無用の言に敝るるは非なるか。而して楊墨是れのみ。故に此れ皆多駢・旁枝の道、天下の至正に非ざるなり。

《本文譯》

こうしたわけで視力に餘分なものがある者は、青赤黄白黒の五色に亂され、あや模様¹⁰に心を奪われる。青や黄色のきれいな色彩や美しいあや模様が輝いているのは間違っていないか。そして離朱こそがその例である。聴力に餘分なものがある者は、宮商角徵羽の五聲に亂され、

黄鐘などの六律に心を奪われる。金石・絲竹・黄鐘・大呂などの美しい音律は間違っていないか。そして師曠こそがその例である。

仁に餘分なものがある者は、持ちまえを抜き去り生まれながらの性質を取り去ってそこで名聲を収める。世の中の人々に笛や太鼓を鳴らして（宣傳し）及びもしない法を謹んで受けさせることは間違っていないか。そして曾參・史鱸こそがその例である。

辯説に餘分なものがある者は、瓦を積み重ね繩で結び付けるように堅白同異のこじつけの言葉を弄び、辯論をほしいままにし、わずかな名譽のための無用の論争に疲れることは間違っていないか。そして楊朱・墨翟こそがその例である。

だからこれらはすべて餘分で無用な道であって、世の中の本當に正しい道ではないのである。

【語釋】

1 亂五色

青・赤・黄・白・黒の五色。『老子』上篇第十二章に、

「五色は人の目をして盲たらしむ。五音は人の耳をして聾たらしむ」とある。

2 淫文章

淫とは度を過ぐすこと。一説に、青と赤の彩りを文といい、赤と白との彩りを章という。『周禮』考工記注説（赤塚忠氏、「全釋漢文大系16 莊子上」）。

3 青黄黼黻

天子の禮服のぬいとり、斧の形を黼といい、己の字が向き合って反對に並んだ形を黻という。また一説に、白と黒の彩りを黼といい、黒と青との彩りを黻という。『周禮』考工記。「青黄黼黻」は「大宗師」篇にも記されている。

4 而離朱是已

而を胡遠濬は如の假字としているが、その必要はない（赤塚忠氏、「全釋漢文大系16 莊子上」）。離朱は黃帝の時の目のきく人、百歩のさきから細毛をみわけた。『孟子』の離婁・『淮南子』の朱婁と同じ。赤塚忠氏は、「離朱の類は、蜘蛛の緩言であることから推せば、恐らくは邾

の國に傳わっていた傳説で、太古に蜘蛛のような形をした明察な神があったということから轉化して、その緩言が明察の代表人物となったのであろう」という（全釋漢文大系16莊子上）。

5 亂五聲

五聲は宮・商・角・徵・羽の五段階。

6 六律

黃鐘・大簇・姑洗・蕤賓・夷則・無射の音律

7 師曠

晉の平公の樂師、音律をよくし、鬼神をも感動させた。『孟子』離婁章句上に「師曠の聰も、六律を以てせざれば、五音を正すこと能はず」とあり、『史記』には「師曠は冀州南和の人。生まれながらにして目無し」とある。

8 擢德塞性以收名聲

擢は、取るの意。王念孫は、『廣雅』に云ふ、擢は、取なり、拔なり。『淮南』俶眞篇に曰はく、（夫の）俗世の學（のごとき）は、（則ち）徳を擢き性を縫り、内は五藏を愁へしめ、外は耳目を勞し、乃ち始めて物の毫芒

を招螻振縫して、仁義禮樂を搖消掉し、行を暴かにして智を天下に越れしめ、以て名聲を世に招號す。又曰く、今萬物の來たりて、吾が性を擢拔し、吾が情を撻取すとは、皆其の證なり」という（『讀書雜誌』）。

9 曾史

曾參と史鱈。曾參は孔子の門人、親孝行をもってきこえ、『孝經』の作者に擬せられた。史鱈は春秋衛の大夫、字は子魚、靈公の臣任用の非をいさめた。

10 堅白同異

堅白は、白く硬い石は、白と堅との二概念であるといふ、いわゆる名家の命題。同異はいわゆる名家（辨者）の根本問題であって、物の相違をいかにして認識して、その正しい名辭を定めるかを論ずることをいう。さわって堅く、見て白い、堅くて白い石は一つか否かを論じた詭辨。「齊物論」篇にも記されている。

11 楊墨

楊朱と墨翟。楊朱は戰國の思想家。老子の流れをくむといわれ、全性保眞の個人主義をとなえ、墨翟の兼愛説

(博愛主義)と對立した。墨翟は戰國魯または宋の思想家。兼愛を説き、節用を尊び、非戰を論じ、時弊を減らすよう主張した。なお、楊墨の言は『孟子』書中に多くみられ、當時の思想界において両者が大きな勢力を占めていたことを知ることができる。墨翟の道術については『莊子』「天下」篇に記載がある。

【釋文】

「黼黻」音甫、下音弗。『周禮』云、白與黑謂之黼、黑與青謂之黻。「煌煌」音皇。『廣雅』云、光也。向崔本作鞮。向云、馬氏音煌。「毛詩傳」云、皇皇、猶煌煌也。煌、又音晃。

「五聲」本亦作五音。「師曠」司馬云、晉賢大夫也、善音律、能致鬼神。『史記』云、冀州南和人、生而無目。

「擢德」音濯。司馬云、拔也。

「纍」劣彼反。「瓦」危委反、向同、崔如字。一云、瓦當作丸。「結繩」李云、言小辯危詞、若結繩之纍瓦也。

崔云、聚無用之語、如瓦之纍、繩之結也。「竄」七亂反。

『爾雅』云、微也。一云藏也。「句」紀具反。司馬云、竄

句。謂邪隱微隱、穿鑿文句也。一音鉤。「敝」本亦作弊。徐音婢、郭父結反、李步計反。司馬云、罷也。「跬」徐丘婢反、郭音屑。向崔本作跬。向丘氏反、云、近也。司馬同。李・垂反。一云、敝跬、分外用力之貌。「譽」音餘。

「此數」色主反。下文此數音同。

《書き下し文》

「黼黻」は音甫、下は音弗。『周禮』に云ふ、「白黒と與にす之れを黼と謂ひ、黒青と與にす之れを黻と謂ふ」と。「煌煌」は音皇。『廣雅』に云ふ、「光なり」と。向崔本は鞮に作る。向云ふ、「馬氏は音煌。『毛詩傳』に云ふ、皇皇は、猶ほ煌煌のごときなり。煌は、又音晃」と。

「五聲」は本亦五音に作る。「師曠」は司馬云ふ、「晉の賢大夫なり、音律を善くし、能く鬼神を致す」と。『史記』に云ふ、「冀州南和の人なり、生まれながらにして目無し」と。

「擢德」は音濯。司馬云ふ、「拔なり」と。

「暴」は劣彼の反。「瓦」は危委の反、向同じ、崔は「字の如し」と。一に云ふ、「瓦は當に丸に作るべし」と。「結繩」は李云ふ、「言ふところは、小辯危詞結繩せる暴瓦の若し」と。崔云ふ、「無用の語を聚むること、瓦を之れ暴ね、繩もて之れ結べるが如きなり」と。「竄」は七亂の反。『爾雅』に云ふ、「微なり」と。一に云ふ「藏なり」と。「句」は紀具の反。司馬云ふ、「竄句は、邪説微かに隠れ、文句を穿鑿するを謂ふなり」と。一に音鉤。「敝」は本亦斃に作る。徐は音婢、郭は父結の反、李は歩計の反。司馬云ふ、「罷なり」と。「跬」は徐は丘婢の反、郭は音屑。向崔本は赴に作る。向は丘氏の反、近づくを云ふなり。司馬同じ。李は却垂の反。一に云ふ、「敝跬は、分外に力を用ふるの貌」と。「譽」は音餘。

「此數」は色主の反。下文の「此數」音同じ。

【語釋】

1 『周禮』

周公の撰と傳えられる古文經書の一つ。もと『周官』

と稱し、王莽期に學官に立てられる。「天官」・「地官」・「春官」・「夏官」・「秋官」・「冬官」から構成され、それぞれ職掌を記しているので六官とも六典とも呼稱される。前漢武帝期に發見された時には、「冬官」が缺けていたため「考工記」が代わりに當てられた。

2 「毛詩傳」

|| 「毛傳」。前漢の毛亨（大毛公）・毛萇（大毛公）によって作られた『詩經』の傳（注解）。

3 『爾雅』

現存する最古の字書。周公の作とも孔子の門人の作とも傳えられるが、『詩經』の文字を解釋している部分が多いことから、詩に携わった者と何らかの関係があるとみられる。十三經の一つに數えられる。

4 郭

郭象の注。『釋文』中には、郭璞の注も存在するが、郭とせず郭璞と明示する。

【注】

夫有耳目者、未嘗以慕聾盲自困也、所困常在於希離慕

曠、則離曠雖性聰明、乃是亂耳目之主也。

夫曾史性長於仁耳、而性不長者橫復慕之。慕之而仁、仁已僞矣。天下未嘗慕桀、而必慕曾史、則曾史之簧鼓天下、使失其眞性甚於桀、而必

夫騁其奇辯、致其危辭者、未曾容思於構杌之口、而必競辯於楊墨之間。則楊墨乃亂羣言之主也。

此數子皆師其天性、直自多駢旁枝、各自是一家之正耳。然以一正萬、則萬不正矣。故至正者不以己正天下、使天下各得其正而已。

《書き下し文》

夫れ耳目有る者は、未だ嘗て聾盲を慕ふを以て自ら困しまざるなり。困しむ所は常に離を希ひ曠を慕ふに在れば、則ち離・曠は性聰明なりと雖も、乃ち是れ耳目の主を亂すなり。

夫の曾・史は性仁に長ずるのみ。而して性長ぜざる者は横に復之れを慕ふ。之れを慕ひて仁たれば、仁已に僞なり。天下未だ嘗て桀・跖を慕はずして必ず曾・史を慕ふは、則ち曾・史の天下に簧鼓して、其の眞性を失

はしむること桀・跖よりも甚だしければなり。

夫れ其の奇辯を騁し、其の危辭を致す者は、未だ曾て思ひを杌の口に容れず、而して必ず辯を楊・墨の間に競ふ。則ち楊・墨は乃ち羣言を亂すの主なり。

此の數子は皆其の天性を師とし、直自ら多駢・旁枝なるは、各おの自ら是れ一家の正なるのみ。然れども一を以て萬を正せば、則ち萬正しからず。故に至正なる者は己を以て天下を正さず、天下をして各おの其の正しきを得しむるのみ。

《譯文》

そもそも耳や目が備わっている者は、目が見えないものや耳が聞こえないものに思いを寄せて自分からなやむことなどけっしてない。なやむ原因はきまって離朱をのぞみ師曠に思いを寄せることにある。つまり離朱や師曠は持って生まれた性質が見たり聞いたりするのにすぐれているとはいえ、それこそが耳や目の持ち主を惑わしているのである。

あの曾參・史鱈は持って生まれた性質が仁に秀でてい

ただけのことである。しかし持って生まれた性質が仁に秀でていない者は好き勝手にくりかえしその性質に思いを寄せる。そうして仁をおさめることができて、その仁はもはや作り物にすぎない。世の中の人々がこれまでに桀や盗跖に思いを寄せることなく必ず曾參や史鱣に思いを寄せたのは、曾參や史鱣が世の中の人々に笛や太鼓を鳴らし（仁を宣傳して人々を惹き付け偽りの仁を修めさせ）桀や盗跖よりもひどく人間の眞の本性を失わせているからである。

そもそもあのこじつけの辯論をほしいままにし、あのあやうい言葉を伝える者たちは、まだ深い考えを愚か者が口にすることを許したことがなく、楊朱・墨翟兩學派の理論の中で論争をおこなっている。つまり楊朱・墨翟は多くの人の言葉を亂す謀主なのである。

ここに挙げた數人はすべて天から受けた性質を手本としているが、ただ自然に生じた餘分で無用なものにより、それぞれが自分で一流派の道理としているにすぎない。しかし一人（の餘分な性質）によって萬人（の性質）を

問いただせば、萬人（の性質）は曲がってしまう。だから本當に正しい者は自分で世の中の人々を問いたださずとはせず、世の中の人々にそれぞれの正しさをさとらせるだけなのである。

【語釋】

1 桀跖

桀は夏王朝最後の王の諡。跖は盜跖、大泥棒の名。凶惡なものたとえ。

2 櫛杙

教えても分からず、言葉も知らない男に付けられた名。愚か者のたとえ。『春秋左氏傳』文公十八年に「顓頊氏に不才の子有り。教訓すべからず、話言を知らず。之れに告ぐれば則ち頑、之れを舍けば則ち鬻、明德を傲很し、以て天常を亂す。天下の民以て之れを櫛杙と謂う」とある。

3

【本文】

彼正正者、不失其性命之情。故合者不爲駢、而枝者不爲跂。長者不爲有餘、短者不爲不足。是故鳧脛雖短、續之則憂。鶴脛雖長、斷之則悲。故性長非所斷、性短非所續、無所去憂也。意仁義其非人情乎。彼仁人何其多憂也。

《書き下し文》

彼の正正なる者は、其の性命の情を失はず。故に合せし者は駢と爲さず、而して枝なる者は跂と爲さず。長き者は餘り有りと爲さず、短き者は足らずと爲さず。是の故に鳧の脛は短しと雖も、之れを續げば則ち憂ひ、鶴の脛は長しと雖も、之れを断てば則ち悲しむ。故に性の長きは断つ所に非ず、性として短きは續ぐ所に非ず。憂いを去る所無ければなり。意ふに仁義は其れ人情に非ざるか。彼の仁人は何ぞ其れ憂ひ多きや。

《本文譯》

あの眞の道とは、それぞれが持つて生まれた性質の本性を失わないことである。そこで足の親指と人差し指がくっついた者は駢という奇形とはみなさず、手の親指が二つに分かれた者は跂という奇形とはみなさない。長い

者は餘分ではなく、短い者は不足ではない。

こうしたわけで鴨の脛が短いといっても、これをむりに長いものにしてようとすると繼ぎ足せば苦しみ、鶴の脛が長いといっても、これを切り取れば悲しむ。

だから生まれながらにして長いものは切り取るべきでなく、生まれながらにして短いものは繼ぎ足すべきでない。憂いを取り除く必要がないからである。

考えてみると仁義は人が持つて生まれたありのままの姿ではないのか。(それなのに)あの仁(につとめる)人々はなんと憂いが多いことだろう。

【釋文】

「不爲跂」其知反。崔本作枝、音同。或渠支反。

「鳧」音符。「脛」形定反。釋名云、莖也、直而長、如物莖也。本又作脛。「鶴」戸各反。「斷之」丁管反。下及注同。

「去憂」起呂反。注去憂、去也同。

「意」如字。下同。亦作醫。

《書き下し文》

「不爲跂」は其知の反。崔本枝に作る、音同じ。或ひは渠支の反。

「梟」は音符。「脛」は形定の反。『釋名』に云ふ、「莖なり、直にして長きこと、物の莖の如きなり」と。本又戸に作る。「鶴」は戸各の反。「斷之」は丁管の反。下及び注同じ。

「去憂」は起呂の反。注の「去憂」・「去也」も同じ。「意」は字の如し。下同じ。亦醫に作る。

【注】

物各任性、乃正¹也。自此已下觀之、至正²可見矣。

以枝正合、乃謂合爲駢。

以合正枝、乃謂枝爲跂。

以短正長、乃謂長有餘。

以長正短、乃謂短不足。

各自有正、不可以此正彼而損益之。

知其性分非所斷續而任之、則無所去憂而憂自去也。

夫仁義自是人之情性、但當任之耳。

恐仁義非人情而憂之者、眞可謂多憂也。

《書き下し文》

物は各おの性に任せ、乃ち正を正とするなり。此れより已下は之れを觀て、至正見るべし。

枝を以て合を正す、乃ち合を謂ひて駢と爲す。

合を以て枝を正す、乃ち枝を謂ひて跂と爲す。

短を以て長を正す、乃ち長もて餘り有りと謂ふ。

長を以て短を正す、乃ち短もて足りずと謂ふ。

各おの自ら正しき有れば、此れを以て彼を正し、而して之れを損益す可からず。

其の性分の斷續する所に非ざるを知りて之れに任せば、則ち憂ひを去る所無くして憂ひは自ら去るなり。

夫れ仁義は自ら是れ人の情性なれば、但だ當に之れに任すべきのみ。

仁義の人情に非ざるを恐れて之れを憂ふる者は、眞に憂ふること多しと謂ふべきなり。

《譯文》

物はそれぞれが持つて生まれた性質にゆだねることによって、はじめて眞の道となることが出来る。この文章

以降は、(實例を) 傍觀することによって本當に正しい道を認めることができる。

指が分かれているものによって指がくっついた者をただすと、指がくっついた者を駢¹という。

指がくっついたものによって指が分かれている者をただすと、指が分かれている者を跂²という。

短いものによって長いものをただすと、長いものを餘分³だという。

長いものによって短いものをただすと、短いものを不足⁴だという。

それぞれに正しいものがあるので、比較の対象を設けて正し、そして減らしたり増やしたりしてはいけない。

それぞれが持つて生まれた分を切り取ったり継ぎ足したりするべきではないことを知って、あるがままにまかせれば、憂いを取り除く必要がなく憂いは自然と去るのである。

そもそも仁義は自然に人が持つて生まれたありのままの姿なので、ただ仁義に身をゆだねるべきである。

仁義は人としての感情ではないのではないかと心配して憂える者は、本當に憂いが多いというべきである。

【語釋】

1 正正

眞の道をいう。

2 至正

きわめて正しいこと。

3 情性

情は實相(ありのままの姿)。性は人の生まれつき持っている本性。

4

【本文】

且夫駢¹於拇者、決²之則泣、枝³於手者、齧⁴之則啼。二者、或有餘於數、或不足於數、其於憂一也。今世之仁人、蒿⁵目而憂世之患。不仁之人、決性命之情而饗⁶貴富。故意⁷仁義其非人情乎。自三代以下者、天下何其囂⁸囂也。

《書き下し文》

且つ夫れ拇に駢ある者は、之れを決すれば則ち泣き、手に枝ある者は、之れを齧めば則ち啼く。二者、或いは數に餘り有り、或いは數に足らざるも、其の憂ひに於けるや一なり。今世の仁人は、蒿目して世の患いを憂う。不仁の人は、性命の情を決して貴富を饗^{むさほ}る。故に仁義は其れ人情に非ざるかを意ふ。三代自り以下は、天下何ぞ其れ囓囓たるや。

《本文譯》

そのうえ足の親指が人差し指とくっついている者は、(くっついた指を) 切り裂けば涙を流し、手の親指が二つに分かれている者は、(餘分な指を) 噛み切れば泣きわめく。両者は、一方は指の數が餘分であり、一方は指の數が不足しているが、憂える點ではどちらも同じである。

今世の中の仁につとめる人々は、はるか遠くの事跡を望み見て世の中の災難を憂えている。

仁に氣を留めない人々は、持って生まれた性質のあるがままを切り裂いて權力・財産を貪っている。

だから考えてみると仁義は人が生まれながらにして持っている性質であろう。(夏・殷・周の) 三代以降、世の中はなんと(ゴウゴウと) 憂世にうるさいことか。

【語釋】

1 決

齒で噛み切る。絶つ。

2 蒿目

世の中の人々の目を亂す意。なお、兪樾は、「司馬と郭注とは共に蒿目の二字を以て句と爲し、解して天下の目を亂すと爲すは、義殊に未だ安からず。蒿は乃ち瞳の段字。『玉篇』目部に、『瞳は庾鞠の切、目明かに又望むなり』と。是れ瞳を望視の貌と爲すなり。仁人の天下を憂ふるや、必ず之れが爲に瞭然として遠望す、故に瞳目して世の患を憂ふと曰ふ。瞳と蒿とは、古音相近し、故に通用するを得(『諸子平議』)」というが、注に従う。

3 故意仁義其非人情乎

赤塚忠氏は、「郭象は『夫れ仁義は自ら是れ人の情性なれば、但だ當に之れに任すべきのみ。仁義の人情に非

ざるを恐れてこれを憂ふる者は、眞に多憂と謂ふべきなり』と解説しているが、この篇には仁義が人間本来の性情であるという主張はない……中略……『仁義は天性を損なうものであることをこそ強調しているのである』と述べる（全釋漢文大系16 莊子上）。確かに『莊子』本文では、文章の前後関係から赤塚氏の述べている通りに解すべきであるが、仁義を人間本来の性情と説く所に郭象の特色がみられるのである。

4 三代

夏・殷・周の三代。「駢拇篇」後半に「虞氏の仁義を招げて……」とあることから、儒家の尊ぶ聖王である禹・湯・文武が、仁義によって統治した三代を指す。

5 囂囂

ゴウゴウ。擬聲語。

【釋文】

「齷」李音紘、恨發反、齒斷也。徐胡勿反。郭又胡突反。「啼」音提。崔本作諦。

「蒿目」好羔反。司馬云、亂也。李云、蒿目、快性之

貌。

「饜」吐刀反。杜預注『左傳』云、貪財曰饜。

「囂囂」許橋反、又五羔反。『字林』云、聲也。崔云、

憂世之貌。

《書き下し文》

「齷」は李は音紘、恨發の反、齒斷なり。徐は胡勿の反。郭は又胡突の反。「啼」は音提。崔本は諦に作る。

「蒿目」は好羔の反。司馬云ふ、「亂なり」と。李云ふ、

「蒿目は、快性の貌」と。

「饜」は吐刀の反。杜預『左傳』に注して云ふ、「財を貪るを饜と曰ふ」と。

「囂囂」は許橋の反、又五羔の反。『字林』に云ふ、

「聲なり」と。崔云ふ、世を憂ふの貌」と。

【語釋】

1 『字林』

七卷。南朝、宋の呂忱の撰。文字の訓詁を記した辭書。

【注】

謂之不足、故泣而決之。以爲有餘、故啼而齧之。夫如此、雖羣品萬殊、無釋憂之地矣。唯各安其天性、不決駢而齧枝、則曲成而無傷。又何憂哉。

兼愛之迹³可尙、則天下之目亂矣。以可尙之迹、蒿令有患而逐憂之、此爲陷人於難而後拯⁵之也。然今世正謂此爲仁也。

夫貴富所以可饜、由有蒿之者也。若乃無可尙之迹、則人安其分、將量力受任、豈有決己效彼以饜竊非望哉。

夫仁義自是人情也。而三代以下、橫共囂囂、棄情逐迹、如將不及。不亦多憂乎。

《書き下し文》

之れを足りずと謂ふ、故に泣きて之れを決く。以て餘り有りと爲す、故に啼きて之れを齧る。夫れ此くの如くんば、羣品萬殊なりと雖も、憂ひを釋くの地無し。唯だ各おの其の天性に安んじて、駢を決き、而して枝を齧らざれば、則ち曲成するも傷つくこと無し。又何をか憂へんや。

兼愛の迹尙ぶ可きときは、則ち天下の目亂る。尙ぶ可

きの迹を以て、蒿して患有らしめて逐に之れを憂へば、此れ人を難に陥れて而る後に之れを拯ふことを爲すなり。然れども今の世正に此れを謂ひて仁と爲すなり。

夫れ貴富の饜る可き所以は、之れを蒿す者有るに由るなり。若し乃ち尙ぶ可きの迹無ければ、則ち人其の分に安んじて、將に力を量りて任を受けんとす。豈に己を決き彼に效ひて以て非望を饜竊すること有らんや。

夫れ仁義は自ら是れ人情なり。而して三代以下、横に共に囂囂とし、情を棄て迹を逐ふも、將て及ばざらんとするが如し。亦憂ひ多からずや。

《譯文》

足の親指が人差し指とひっついてるのは不足しているのだといい、そこで涙を流して切り裂こうとする。(手の親指が二つに分かれていることは)餘分だと思い、泣きわめいて噛み切ろうとする。これでは、もし萬物がいろいろ異なっていると、悲しみ苦しみを取り除く餘地はない。ただそれぞれが自然に得ている性質に満足して、足の親指が人差し指とくっついてるのを切り裂こうと

せず、手の親指が二つに分かれているのを噛み切ろうとしなければ、正しく備わっていないとはいえ傷つくことはない。さらにそのうえ何を憂えることがあるか。

兼愛の事跡を慕うとき、世の中の人々の目が亂れ秩序がなくなる。慕うべき事跡によって、遠くを望み見て災難を發生させ、とうとうその状況を憂えるのは、つまり人々を災難に陥れた後に助けることになる。しかし今の世の中はまさしくこれを仁というのである。

人々が權力・財産を貪る原因は、權力・財産を目をこらして求める者がいるからである。もしも慕うべき事跡がなければ、人々は自分のもって生まれた分に満足し、自分の力と相談して任を受けようとする。(そうならば) どうして自分の持つて生まれた性質を切り裂いて、權力・財産を求める者を見習い、分を超えた望みを貪り盗む必要があるか。

仁義は人が生まれながらにして持っている性質である。しかし(夏・殷・周の)三代以降、(仁義を追求する者は)好き勝手に群れて(ゴウゴウと)うるさく世の中を

騒がし、持つて生まれた性質を捨て去って事跡を追求することが追っても追っても追いつかないようであるのは、憂いが多いことではないか。

【語釋】

1 羣品萬殊

羣品はいろいろな種類の物、萬物。萬殊はいろいろ異なっている物。

2 曲成

一般的には、一つ一つつぶさに作り上げる意であるが、ここでは上文の「棄才」・「棄用」と同じく、役に立たない曲がったもの、正常ではないもの。『老子』第二十二章には「曲なれば則ち全し」とある。

3 迹

現象的な事跡。尙、郭象は「迹」に對し、「所以迹」という概念を持ちだして、「迹」の本體を特定している。郭象にとって「迹」とは「所以迹」の様々な表現形態の一つであり、「所以迹」を「眞性」或いは「自然」として『莊子』本文を解釋する郭象にとって、「應帝王」篇

の注に「所以迹者、無迹也」とあるように、「本體の無」を否定することはなく、矛盾したロジックを「獨化」といった言葉によって繋ぎ止めている（湯一介『郭象與魏晉玄學』を参照）。

4 蒿

本文の語釋（蒿目）を参照。

5 拯

すくう。たすける。